

変わらない自分の中で変わってゆく

千澤 賢太郎

(17-1, ベリーズ, 養護, 千葉大学附属特別支援学校)

今ご紹介に与った千澤賢太郎と申します。現在千葉大学附属特別支援学校で養護教員をやっています。現在やっているのは、生活単元を極める学校でして、遊びという活動を一生懸命やっているのですが、今日はこのような場をお借りして私が2年間ベリーズという国で何をしてきたかというのをお話できればと思います。私も3年前、ちょうどこの時期、1月の初めに同じようにこの場に座らせていただいて、その頃はまだベリーズって何だろう、どこだろう？隣の人に「あんたどこ行くの」みたいな、ドキドキ、ワクワクしながらいた頃でした。それが3年経った今、どうなって帰ってきたのかというのがご紹介できればと思います。よろしくお願いいたします。

まずベリーズと聞かれて、今までベリーズという名前を、聞いたことがありますか？私は知りませんでした、派遣されるまで。どこの国で何なのだろうと思っていました。これがベリーズの国旗なんですけど、現物でお持ちしたなんですけど、見てわかるように、中に人がいるんですよ。国旗の中に人が入っているというのは世界でベリーズだけだそうです。場所はどこにあるかというと、中米です。ここにメキシコのユカタン半島があります。先ほどのビデオでホンジュラスの先生の紹介があったんですけど、ホンジュラスが真下にあります。その上の小さな小さな国です。大きさは日本の四国程度の大きさしかありません。本当に小さな国です。また四国程度といっても、実際に人が住める地域は本当に限られていてほとんどがジャングルで、日本で言えばちょっとした町くらいの大きさのものが点々と5～6つあるくらいの国です。人口は約30万人です。本当に少ないですね。以前調べると、新宿区と同じくらいだそうです。それが一つの国の人口だということです。人種は、先ほどの国旗にもありましたように、見てもらってわかるように黒人と白人を意味しているそうなんです。仲良くという意味なんですけど、すごく多民族国家で、クレオールというヨーロッパ人と黒人との合いの子、黒人の方は奴隷時代にいらっしゃった方々、あとはメキシコのメスチーソの方、先住民のマヤ、中国から来た人、台湾から来た人、その他ヨーロッパから移住された方がたくさんいる。5人集まればほとんどが人種も宗教も違うような、そんな国でした。公用語は英語です。各隊員の方は経験されていると思うのですが、公用語と実際現地でしゃべっている言葉は全く違います。一応英語は通じるんですけども実際は現地の言葉ということでした。私は北寄りだったのでスペイン語がすごく話されていました。気候は熱帯、雨季・乾季しかありません。産業は、人口が少ないということなんですけど、サトウキビ、オレンジ、観光、これくらいしかなかったような感じがしました。ほとんどが輸入に頼っている国で、そのため物価が非常に

高かったです。例えば日本のペットボトル、日本で 110 円とかそれくらいですかね。同じくらいです。現地でも日本円で 90 円、80 円くらいな感じの国でした。通貨はベリーズドルといいます。1 USD = 0.5 BZD ということで計算がしやすいのですが、USD の方も非常に流通している国でした。政治は議院内閣制、元首は未だにエリザベス女王なんです。実はこの国、1970 年代にイギリスから独立したばかりなんです。その当時は英領ホンジュラスという名前でした。独立はしているんですけども未だに元首だけはエリザベス女王、お札にもエリザベス女王の顔があるという、そんな国でした。世界第 2 位のバリアリーフがあるということで、ダイビングする人にとってはオーストラリアのあそこと沖縄とここ、というくらい有名な所らしいです。私は行ってから知りました。ベリーズというのはこのような国です。

私は一体何をしてきたのか。その前に私はなぜ隊員に参加したかといいますと、隊員に参加した頃がちょうど 30 になる手前でした。そのとき病院を 6 年間やり終わったところなんですね。その時に疑問に思うことが多々ありまして、俺が進んできた道は合っているのかと悩み始めた頃でした。初心のときに描いたことが、今自分は出来ているのかとか、日々悩むことが多かったんです。そのときにたまたま学校で現職教員参加制度のお知らせがあったので、「これだ」と思って参加させていただきました。何か挑戦したかった、というのが、参加のきっかけになりました。

配属は Ministry of Education です。文部科学省みたいな、ここに配属になりました。勤務先は Marry Hill RC School Special ED ということで、ベリーズの学校はほとんど教会が経営をしているという形でした。私の場合、RC、ローマンカトリックの学校でした。先生の給料は学校から払われるのですが、学校の経営自体は教会のグループがそれぞれやるということでした。私の場合はローマンカトリックのスクール、その中にある特殊学級という形になりました。

これは本校舎のほうで、日本と違って廊下がないので建物があってすぐ教室という形になります。この辺が教室の入り口になるんですけど、すぐ中です、でなきゃ暑くてやってられないということもあるのですが。これが全校生徒です。日本でいう小学校 1 年生から中学校 3 年生までの学年がエレメンタリースクール、プライマリースクールとしていました。これが私が所属していた Special ED、特別支援学級というところになります。小さな小屋という感じで離れにあって、本校舎と離れているところも不都合がいろいろあったのですが、それでも。

配属先はコロサルという、国でいう第三都市ぐらいの北寄りのところでした。配属期間は 1 年 9 ヶ月です。要請内容としましては、同校には特殊学級があり、障害を持つ生徒が在籍しているがこれを指導する専門教員がいなかったためということで、ベリーズはすごくアメリカから近いということもありまして、色々な情報はすごく入ってくるんですが、なんとか養護学校を作れたり、特別支援学級が作れたりしたのだけど、実際まだまだ教員を養成するという、その指導者を育てる環境がなかったり、そういうところだったので、このようなものが求められていたのだと思います。私の地位と

しては、養護教員コーディネーターということです。業務内容としましては、さまざまな障害を持つ児童・生徒への指導、養護担当教員への助言・指導、養護教育センター設立の計画・立案というのが要請内容でした。ここから実際、私がどのような活動をしてきたかというところに移っていきたいのですが、本題は先ほどお話ししたので、私の学級のお話です。

生徒は12名いました。この12名というのは、年齢は先ほどお伝えしたように6歳～15歳までいました。要するに小学校1年生から中学校3年生の子が一つの教室にいるんです。また障害児のほうも多様でして、肢体不自由を持つ方から知的な障害を持っている方、言語障害を持っている方、聴覚障害、視覚障害、全部が一つの教室に、しかも年齢はバラバラで在籍しているという形でした。そのうち教員は1名、サポート教員ということで近くから助けを求めて、地域の方で助けを求めてということでもう一人入ってきて、あと私が入りました。

赴任して最初の3ヶ月間何もできない状況でした。何をしたらいいんだろう、先ほど言った状況が非常に辛かったんです。今まで私は日本の恵まれた環境、やりやすい学校の中で仕事していたのがいきなり年齢がバラバラ、障害の形がいろいろあるという中で何をしたらいいんだろうというところで、何もできなかったのが現状でした。その中で3ヶ月間、私が最初に考えた、とにかく見よう、とにかくここの学校、この学級がどんな所なのか見よう、というところから始めて、導き出した私がやっていこうと最初に決めたことです。まず、教育課程の定義というものが必要じゃないかと思いました。授業はあってないようなものなんです。授業時間はあるんですけど、全部バラバラです。先生の気分次第だったんです。「今日は何の教科書持ってきてる？」という感じで、今日10人中8人くらいが算数の教科書を持ってきている。じゃあ今日は算数をやろうか、今日は暑いから体育はやめよう、とか、あってないようなものばかりだったので、まず時間通りに進めていくものをしていきたいなと思いました。これは必ず必要だった、様子を知るということを考えました。今お伝えしているように、それだけバラバラな子たちがいるので、学力の差がものすごくありまして、私が見る限りこの子はもっとできるんじゃないかな、という子が思ったよりできなかったり、ということがあって、まずはそこからやりたいなという、基礎的な学力はある子が多かったのでやりたいなと思いました。担任の障害理解、学級経営への提案、担任が行う授業への協力・提案、この辺が私の課題で、最初に抱えました。

それでは実際にやってきた内容をお伝えしたいと思います。第一期、最初は先ほどお伝えしたように、観察をとにかくしました。見るというのがとにかく解決だと思いました。それからこれはすぐにできたことだったので、体育の授業をやらせていただきました。子供たちは外で活動するのが大好きだったので、これはすぐに授業に移せまして、このような形で体育の授業で、これはマラソンをやっていました。これはソフトボール投げ。これは縄跳びをやりました。これは日本で私がやっていたことだったので、バケツベースというものをやりました。これは子供たちには好

評で、サッカーがやはり人気だったので、それを少し変化した形のようなものだったので、とても人気がありました。たまには他の、これは体育教員の方なんですけど、活動に来てもらって一緒に協力してやったこともありました。これは日本でよくやられている（ボッチャ）というゲームなんですけど、これをやりました。これは教材がなかったので、実はこれ、赤いガムテープと青いガムテープでぐるぐる巻きにただけなんですけど、十分にできました。中に砂を詰めて石を詰めてガムテープでまとめたという感じです。

第二期、ここが中心になっていくところなのですが、私が中心を置いていた個別指導をやらせていただきました。最初に言ったように学力の差がすごくあるというところで、これは一人ひとりを見ていかなきゃいけないなというのを非常に感じました。その中で、このように一人ひとり抽出という形で別教室を用意していただいて、一人一週間に2～3回しました。この辺の教材は随分その辺から集めて作ったりしました。教科ができる子は教科を、教科まで行けない子に関してはそのような個別に合った内容をやりました。できる子はパソコンも指導したりしました。中心としては第二期ということで中盤は個別指導、一人ひとりの指導を中心に行いました。

第三期をいうことで、これは最後の4ヶ月なんですけど、これは私が一番やりたかったことです。何かというと集団授業というものが成立していなかったんです。授業は集団で行われていたんですけど、先ほど言ったようにその日の担任の気持ちによって何をするかということもありまして、できない子はもちろん置いていかれますし、できる子でも遊んでいても教員は何も言わなかったのです是非これは集団でやるものということで、作業をやりたいなと思いまして計画しました。実はこれ最初に計画していたんですけど、なかなか機会が無く、やっと最後の3～4ヶ月目で、ゴーサインが出て、出来ました。何も無いところから作っていきました。教室の前の芝生の上でいらない廃材を使って、現地の方と一緒に作っていきました。農作業を選んだのですが、これは私がやってきたということで選ばせていただきました。こんな感じで子供たちと毎日共に働くということでやらせていただきました。3ヶ月しかなかったんですけども、なんとか一通りの過程を終えることが出来まして、最後、大根を収穫できて、みんなで食べました。

こんな感じで私はやらせてもらったのですが、やってきたことは体育、個別指導、作業ということだったのですが、私は最初すごく悩んでいました。何かというと、現地で自分は何者なのかということでした。JOCV、ボランティアなのかそれとも日本から来た教員なのか、何なのかというところで非常に葛藤したことがありました。その中で私が導き出した答えというものは、日本の教師でなくボランティアでもなくこの学校の一教員でありたいなと思いました。その中で私の支えになったものは私がやってきた6年間でした。それがここベリーズの活動での全てになりました。体育にしても個別の支援に関しても、やってきたものは全て日本で私が学んできたことでした。逆にそこしかなかったんです。何か新しいものを、変えていこう、この国に合っ

たものを、というのを考えていたんですけど、なかなかうまくいかない日々が多くありました。その国に合わせていくのは大切なことだったのですが、まずは自分がどんなことをやってきたのかなというところが大切でした。この2年間私が学んだことというのは、題名にある言葉なんですけど、変わらない中で変わっていくというのは、私の中では思い、願いというのは何一つ変わらない、変わりはなかったのですがそれが結果的に周りが変わっていくことになったのかなと思いました。

2年間やってきたことでそのようなことを感じ、帰ってきました。私は今何をしているかという、なかなか養護学校の場合は還元できないところがあります。正直、全く何もできていません。何かできないかなという気持ちはあるのですが、出来ないでいるところがあるので、今後その辺を私なりに探して考えていきたいと思っています。